

==== 特集 イタリア協同組合運動の現在 =====

私とイタリアーそして協同

==== 芹沢 憲 ー (東京都/小豆沢病院付属高島平診療所長)

昨年暮れ、久しぶりに東京事業団の皆さんとイタリアへ行ってきた。「ブオンナターレ」(クリスマスおめでとう)と会う人ごとにあいさつする時期のイタリアは初めてで、雪景色や、クリスマスのプレゼントを買い求めて町にくだした人々など、今までとは違ったイタリア人の生活を見ることができた。

そもそもイタリアを最初に訪れたのは、1978年、当時のユーゴスラビアのドブロプニクで開催された世界労働衛生学会に出席のために立ち寄ったことにはじまる。同行の上畑先生(現在、国立公衆衛生院)達が、イタリア語を勉強しておられ、イタリアを訪問してイタリアの労働衛生や公害などの取組みを見たり、種々の会合、見学、交流をセットしていただいた。

ローマでは、当時のイタリア共産党書記長のベルリングル氏の弟さんで、ローマ大学で、衛生学の教授をしておられるジョバンニ・ベルリングル教授にお会いして、イタリアの医療改革について話を聞くことができた(これは、その年の12月実施された)。政策はともかくとして、ローマ大学の現職教授がイタリア共産党の下院議員であることを後から教えられ、日本では考えられないことでびっくりしたものだ。教授との出会いも少し変わっていた。日本から一緒に行った仲間たちが、ローマ大学生協の店でコーヒーを飲んでくるというので私一人が構内を眺めていたところ、一人の紳士が英語で「Where do you go?」と語りかけてこられた。私が「ベルリングル教授に」と答えると、「I am Berlingueru」とのこと、驚いた。他の連中が帰ってくるまで教授と立ち話をしながら待ったが、何としたこと、これが下院議員の教授かと驚かされた。後年、日本に来られたイタリア人の女医さんにこの話をしたら、ローマに帰って教授に

聞いたら覚えているといわれた由、またまた驚いた。

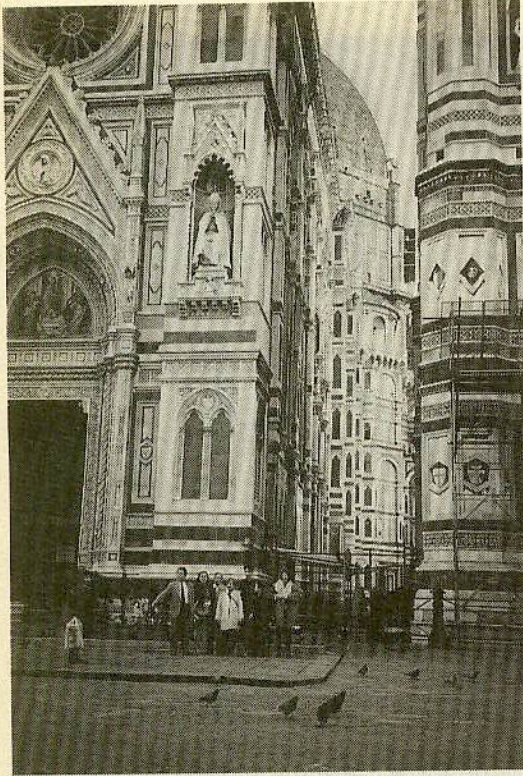
イタリアとのおつきあいの入口で、イタリア共産党の書記長の弟、国会議員の現職ローマ大学教授にこの様にしてお会いしたのは、ある意味でその後のイタリア観を決定づけたかもしれない。

また、ローマにある三大労組統一センターの健康問題を扱っておられた研究所で、『70年代の労働環境』の著者ガストーネ・マリさんという、これまた大変人間的にすばらしい方にお会いし、イタリアの労働者の健康問題についての話を聞き、各地の労働組合を紹介していただいた。最後の晩は所員の方の家にまで押し掛けて12時すぎまで、ワインを飲みながら、“赤い旅団”(過激派)や結婚後の男女別姓などについてすごい議論をした。

その席で、イタリア共産党の洋上ウニタ祭がおもしろいから是非来いとさそわれて、その場で来年また来る約束をしたのが、イタリア通いのきっかけであった。

翌年は8月6日の原爆の日を中心に1週間の日程の洋上ウニタ祭で、700人のイタリア人達の中に約10人の仲間と参加。

ジェノバからシチリヤ島に寄ってギリシャのロードス、クレタ島までの船旅を楽しんだ。イタリア語を話したいこともあったが、前年ローマで知り合っていたフランコ氏一家をはじめ、イタリアの友人をたくさん作ることができ、観光でみるイタリアではなく、日常生活の中のイタリア人(よくしゃべり、よく食べ、よく遊ぶ)を知ることができた。そして、飾り気がなく何でも話し、自己主張はくだらないと思うことでも決してまげないで、お互いに「ノー」「ノー」を繰り返しながら、けんかするでもなくとことんまで議論するイタリア民主主義の基礎をかいま見た気がした。



この船旅の交流の中で、地域の活動、特に子どもから青年、婦人、中年層に至るまでの各年代について、どのような遊びやスポーツを行うかを、地域で検討して作り上げるまでの経験を聞かされた。

前述のフランコ氏はプールを作った時、キリ民党（当時のキリスト教民主党）から共産党まで5つの政党の代表が地域で2人づつき協議しながら作ったという。「共産党でも動く奴と動かない奴がいるが、この時は一番よくやったのは共産党だった。しかし、プールができて最初に泳ぎにきたのはキリ民党の子どもだった」と私たちを笑わせたが、プールを作る課程についての地域での取り組みの討議の方法などを細かく教えてくれた。そして「われわれの地区で前の選挙で投票率は3位だったが今後の選挙では第1党になった」とも付け加えて話してくれた。住民は別に宣伝しなくてもよく見ているともいった。

青少年には自転車、婦人にはバレーボールな

ど、年齢性別にまで分けて種目を選び、それが実現できるように、場所、コーチなどを用意して、具体的日程まで作っているのである。

そこで、日本の革新都政の報告が日本側からされた。東京でも運動場やプールを作ったとか勤労福祉会館をつくったとか話がでた。

彼らからの質問は、「それをどの様に使っているのか？」といわれたのだった。この質問に明快に答えた人はいなかった。われわれの運動は作るまでが主目的になっている面が（すべてそうではないだろうが）ある。イタリアの彼らには、「使うために作らせたのだろう。だったら、できたらどう使うかまでやるのが当然だろう」という考え方だ。考えてみればあたりまえのことだが、そうならないところに、イタリアと日本の大きな違いがあるように思われた。いってみれば、「建て前運動」と「本音運動」の違い。そして運動が、本当に徹底的な討議（一人一人の参加のもとに決定される）に基づくかどうかの民主主義の問題でもあると感じた。

当時、イタリア共産党がとっていた方式であった様だが、「参加の民主主義」が非常に各方面で強調されていたようだ。

その意味で、良くも悪くも、振られる旗についていく民主主義はだめということが実践されており、トリノ大学のイオドール・オドネ教授が『予防と参加の医学』という本を書いておられ、これも当然であるが、インフルエンザの予防にワクチンとかの方法だけでなく古典的ともいえるが、地域住民などをどう教育して参加させていくかという方法の重要性を、当時杏林大学衛生学教室の助教授だった上畑先生にも強調しておられ驚かされたのを覚えている。

さて与えられた紙数も少なくなったが、「参加の民主主義」の視点から、人民の家、地域の公害にたいする取り組み、労働組合運動から協同組合まで、とにかく一人一人が自覚して行動することを確認しながらの意思統一と、その上で要求するだけでなく、自分で創り出していく運動に大きな感銘を受けた。日本のことも考えながら、この物



差しの重要性を感じたし、今もその物差しは確かなものと考えている。

さて、こんなイタリアへの思いとは別に、私の病院（当時院長をやっていた小豆沢病院）の清掃をやっていたいている事業団の方から新聞をすすめられ、読んでいるうちに、日本には少ない「本音の運動」を本気で取り組んでおられる集団だと気づき、その本質的な運動方向を心から支持しつつ、北部の小豆沢の仕事に少しでも協力をと考へながら今に至っている。

その中で、全国的に取り組まれた「1.2.3」運動で、病院の仕事を増やそうということで挨拶にこられたので、病院名簿から板橋区、北区の病院宛に紹介の手紙を書かしていただいた。

その後、小豆沢の事業団の方から暑気払いに一杯やりませんかとの話があり、喜んでお受けしたところ、当日職場責任者の方から感謝状をいただき、大きな花束をいただき、面食らうと同時に、今までの何よりも一番ありがたい感謝状をいただいたと感激した。この席上で、なぜお手伝いするのかという私たちの気持ちを、イタリアの全員参

加の民主主義、連帯の若干の例を引きながらお話し、日本で一生懸命働いているのだから、皆さんと一緒にイタリアへも行ってみたいものだーと話したのがきっかけとなって、昨年暮れのイタリア行きとなった。職場からの参加は、3人であったが大きく伸び出す芽としては大切なものだったのでないか、と思っている。

私自身も、今は診療所の所長をやり、週に2回は往診もやったりして、週のスケジュールはつまっている。だから、休暇をとるのもきつかった。しかし、イタリアの人たちは言う。「働くのは、楽しく生活する、人間らしく生きるためにこそ働くのであって、目的は、人間らしく生きることにあるのだーと」。日本人は、「働くために働いているとしか思えない」とも言っている。

民主、連帯、よい仕事……みんな人間らしく豊かに生きるためにこそ必要なのだと思う。

今後とも、イタリア通いをしながら、日本の中で「本音」で自分たちの生活を豊かにする運動を、社会的にも政治的にもすすめていきたいと思っている。